

Interview

絵本作家 ヨシタケシンスケの頭の中

ヨシタケシンスケ

(絵本作家、イラストレーター)

子どもだけではなく、大人をも魅了するヨシタケシンスケの絵本。
絵本市場の冷え込みが取りざたされるなか、彼は次々にヒット作を生み出す。
さまざまな年齢層の心をつかむ発想は、一体どこから生まれているのか。

ヨシタケシンスケの頭の中を覗く。



ヨシタケの絵本。手前は第6回MOE絵本屋さん大賞第1位受賞作の『りんごかもしれない』。

いつも手帳を持ち歩いていて、思いつくままに絵を描き留めています。ずっと続けていて、今では六五冊目になりました。

実は子どものころは絵が下手で、描くのも好きではありませんでした。自己表現をしたいという気持ちもなく、人が必要とするものをつくる職人になりたくて、美術系の学部がある大学に進み、そこで立体作品のデザイン画などを少し描いていました。

卒業して半年間だけ会社勤めをしたのですが、あまりのストレスから、イラストと愚痴の言葉をセツトで描くようになったんです。会社の机で企画書を書くふりをして落書きをしていました。それも、人の気配を感じたらすぐ描いている手で隠せるサイズの小ささで。もし愚痴を言葉だけで書いて、見られたとしたら、ちょっと問題ですね。その下に小さい女の子の絵を添えると、これは僕じゃなくて女の子のセリフだよ、と言い訳できるんです。ストレス発散以外の何ものでもないのですが。

そういう経緯で小さく絵を描いていたので、いまだに小さい絵しか描けません。イラストと文章が一体化したスタイルもこのときに出来上がりました。

落書きがバレたのがすべての始まり

隠しながら落書きをしていた会社員時代、ある日うっかりして、経理の女性に見つかってしまいました。そして、「あ、かわいい」と言ってもらえたんです。

この人、絶対僕のことを好きなんだ、と思って(笑)。今後どうしよう!? というんなパターンを考えて、結局どうにもならなかったのですが。

そのとき、褒めてもらったことが単純にうれしかった。人に見せて内容を理解してもらえらんだ、かわいいとまで言ってもらえらんだ、すごい! と思って、勢いでイラストをまとめた同人誌を作りました。描き留めていたものを深夜のコンビニでコピーして、紙にべたべた貼り、自費出版で。そのころ、学生時代の立体作品の個展みたいなものをぼちぼちやっていたので、会場で売ろうと思ったのですが、当然、そんなに売れるはずもなく。三〇〇冊刷ったのを、自分の部屋に置いておきましょうがないので、どんだんにあげました。それがいろいろな人の手に渡り、出版社からイラスト集にしないかという話をいただいて、それで三〇歳のときに『しかもフタが無い』(PARCO出版)というイラスト集を出しました。あまり売れなかったのですが、それを見た児童書出版社の編集者が、「この人に絵本を描かせてみたい」と、企画会議で提案してくださったんです。しかしボツにされ、また提案してはボツにされ……を繰り返して、八年目にしてようやく「そんなに言うなら」とゴースサインが出たそうで、そこで初めて連絡をもらいました。

初めての絵本『りんごかもしれない』(ブロンズ新社)を出版したのは、二〇一三年、四〇歳のときのことで。実はそれまで、自分が絵本作家になれる

とは思っていませんでした。というのも、過去にも一度、他社から絵本の打診をいただいたことがありました。そのときはうまくできなかったのですが、もともと母が大の絵本好きで、家庭文庫のようなものを開いて子どもたちを集め、読み聞かせなどしていたので、僕も自然と絵本に囲まれて育ちました。好きでたくさん読んでいたからこそ、絵本というものに対するハードルが高くなっていったのです。すでに名作と言われる作品が多数あるなかで、自分に何ができるのか、と緊張してしまつて。スケッチは描いていたけれど、お話につくれないうし、絵は小さくしか描けないし、色をつけるのも下手。僕は絵本には向いていないのではないかと……。

しかしこのときは、取っかかりとなる企画を三つ、編集者が用意してくれました。その中に「りんごをいろんな目線で見てみる」という、『りんごかもしれない』のテーマそのものずばりの企画があったんです。この時点ではりんごでなくてもよく、何か一つのモチーフをさまざまな角度から見ること、ものの方の多様さを子どもにも面白がってもらうための絵本、という企画でした。これはすごく面白そうだなと思えました。

振り返って考えると、お題を与えられたことで、それまで一〇年以上続けてきたイラストレーターの経験が生きたのだと思います。イラストを発注されるときは、記事の内容にびったりな絵を描くといった役割と、サイズや比率などの制約があります。そ